

2015年3月8日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 22 章 14～23 節

説教：わざわいです

1 疑問：「わざわいです」は、誰を指して言っているのか

聖書を読んでいると、これはどのような意味だろうか、と疑問に思う箇所に出くわすことがしばしばあります。今日の箇所でも、皆さんの心を騒がして疑問に思われるところは、22 節のみことばかもしれません。「人の子は、定められたとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわいです。」

この中に、人の子、すなわちイエスを裏切ることはわざわいであるとあります。前後の文から推測すると、これはユダのことを指しているのだらうとは思いますが、けれども自分もイエスを裏切るようなことを繰り返してきたのではなかったか。そこを突き詰めると、もしかしてこれは自分のことかもしれない。そんな自分へ向けて、「わざわいです」と言われているようで不安です。いったいどういうことか。これから見ていきます。

2 二度と食べることはない

1) 取り去られる

過越の祭りは、当時のイスラエルの暦の1月に祝われました。日本のお正月の食事に似ているところがあります。私が子どもの頃ですが、元旦の朝になると、盛装した祖父は、お正月のごちそうを整えた膳を神棚にささげ、柏手を打って神（もちろん日本の神々ですが）を礼拝しておりました。おそらく、新しい年も作物が豊かに育ち、家族が健康で過ごすことができるようにとお祈りしていた

のでしょう。

もちろん過越の食事は、それとはまったく意味が異なります。過越の食事の由来は、モーセの時代にまでさかのぼります。イスラエルの民がエジプトから脱出するとき、主は過越の羊をほふりその血をかもいと門柱に塗りなさいと命じました。脱出の前日、エジプトに災いか降りかかり、すべての初子が死んでいったのですが、主は玄関に血が塗られている家の前だけは過ぎ越して行き、その家には災いが及ばないようにされ、救われていきました。

その日以来、イスラエルは毎年過越の羊を食べるようにと教えられ、きちんと守ってきました。ところがイエスはこう言うのです。16 節。「あなたがたに言いますが、過越が神の国において成就するまでは、わたしはもはや二度と過越の食事をすることはありません。」また 18 節でも、「今から神の国が来るときまでは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません」とも言われます。

イスラエルにとって大切に守るべき過越の食事であるはずなのに、イエスは二度と食べることはない、杯を飲むこともないと言われるのです。どうしてでしょう。すぐに思いつきます。この方は、もうすぐ十字架で殺され、取り去られていく。だからもう食べられない。そのとおりで。けれどもそれだけではありません。もうひとつ理由があります。

2) 過越の羊となる

これまでは、動物の羊をほふり、それを過越の食事として食べてきました。しかし今は、主ご自身が過越の羊になろうとしています。それで、「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれをおこないなさい」と言われるのです。

食べるということについてですが、ある病院の緩和ケア病棟での取り組みのことを思い出します。その病院では、患者さんがもっとも食べたいものを食事のメニューにしているそうです。これまで病院では病院食が当たり前かと思っていました。確かに病院食は医学的には良いのかもしれませんが、けれども人間にとってもっと大切な事があるのではないかと。人にとって大切なのは、栄養がどうのこうのではなく、おいしい物を口にすることである、それが人のいのちの豊かさにつながっていると言うのです。そのことを聞いたとき、私の中に食事に対する偏った見方があったことに気がつかせられました。その一つが聖餐式のことです。

私はかつて、信仰は信じるとか決断するか、もつぱら頭の中の出来事だと思っていました。何事も形式張ったことは大嫌いな性格ですから、初めて私が聖餐式を目にしたときはとまどいました。これは形だけのことであってなにも意味はない。そんなふうにして心の中で軽蔑していました。

しかし、食事が人の生きる喜びと関係があると教えられたときに、そんな見方は間違いだと気がつきました。信仰は頭の中だけの出来事ではなく、からだと結びついていたのです。食べること飲むことがきちんとセットになっているのです。おいしいものを食べたり飲んだりするときに、深い喜びを感じるように、それと同じように救いも食べて飲むとき

に体の奥底から深い喜びを味わう。その喜びをすべての人に分け与えたいと願って、イエスはご自分のからだを裂いて、私たちに与えるために去って行こうとしています。

2 定められたとおりに

1) 裏切られる

その去ることについて、22 節前半には、「定められているとおりに」とあります。いったい誰が定めたのでしょうか。すぐに思い浮かぶのはイエスを殺そうとしていた祭司長たちです。ユダは彼らからお金をもらって、イエスを売り渡すとの約束しました。周到に練られた暗殺計画によってイエスは去らなければならなくなる。それが、定められたとおりに、ということでしょうか。でももしそうならば、イエスは人間の手にかかり、罠にはまって殺された愚かな男だったという話で終わりです。そんなはずはありません。

イエスは神のひとり子です。去ることも、この方が定めておられたということではないですか。いつ定めたのでしょうか。アダムとエバが罪を犯した日以来、罪人を救わなければならないと心に定めて下さり、そのためにはご自分は去らなければならない。そう決めてくださったのです。

では、どのようにして去るのでしょうか。21 節にあります。「しかし、見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓にあります。」

過越の食事というお祝い席で、イエスが、「裏切る者がここにいる」と語る場面を想像してみてください。和やかな雰囲気の中に突然緊張が走り、弟子たちは大騒ぎしてこの中の誰がイエスを裏切ろうとしているのかと互いに議論をし始めます。隣に座っているお

まえか、それとも向かいの席にいるあいつか。そんな話になるのは、お互いにあまり信頼していなかった証拠かもしれません。もちろん「裏切るのは自分だ」と名乗る者はいません。むしろ逆で、「俺は絶対に裏切らない」とイエスへの忠誠を誓い始めました。その筆頭はペテロです。33節で彼はこう言っています。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」

2) わざわいを引き受ける (イザヤ書 53 章 7, 8 節)

その裏切る者のことについて、イエスは 22 節後半でこう語ります。「しかし、人の子を裏切るような人間はわざわいです。」最初に触れたとおりに、このことばを聞いて落ち着いていられる人はどれだけいるでしょうか。なんだかそわそわしてきます。いったいどんな意味なのかと気になります。

先ほど、人の子が裏切られ、去って行くことはあらかじめ定められているということを見ました。そのことに関連して、イザヤ書 53 章 7, 8 節にこうあります。「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれていく羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれた。」

イエスの時代から数えておよそ八百年前に活躍したイザヤは、救い主が取り去られることをすでに預言していました。なぜ取り去られるのか。「わたしの民のそむきの罪ため」だとあります。言葉を換えれば、民が神を裏

切ったその罪のために、救い主が取り去られるというのです。

ルカの福音書の 22 節のみことばと、イザヤのみことばと比べてみましょう。「人の子を裏切るような者はわざわいです」と、神はここで初めて裏切られたようにも聞こえました。でもどうですか。アダムとエバ以来、人間は数え切れないほど神を裏切り、そむいてきたのではないですか。いまでも続いています。私たちの目は、ユダがイエスを裏切ったところにばかり行き、「ユダはひどい男だ」言って、ユダと自分は違うかのように考える。そんな心を抱きながら 22 節を読むので、イエスもユダのことを「わざわいだ」と言って、嫌っている、嘆いている、そんなふうに読んでいたと思います。

でもイザヤのことばをよく見てください。「わたしの民のそむきの罪のため」とあります。それはユダひとりの話ですか。イザヤは「わたしの民のそむきの罪」と言っています。と言うことはひとりの話ではない。イスラエル全体です。ということは、「人の子を裏切るような人間はわざわいです。」これは、ユダだけではない。彼も含めて全員のことになります。私たちは、神からわざわいと言われるほど、神を裏切ってきたのですから当然と言えば当然。では、そんな私たちはいったいどうなるのでしょうか。

主は十字架につるされ、取り去られていきます。なぜつるされたのでしょうか。私たちのそむきの罪、人の子を裏切った罪を、この方が背負われたからです。そうすると、「人の子を裏切るような人間はわざわいです」とは、誰のことだったのか。もちろん私たちのことです。けれども、主が十字架におかかりになったとき、主がお語りになったみことば、

私たちに厳しく語ったように聞こえたみことば、そのみことばがなんと主ご自身に降りかかっていったのです。私たちは神を裏切りました。私たちがわざわいを受けなければなりませんでした。にもかかわらず主は、ユダや私たちを責めようとはしません。主は私たちの受けるべきわざわいを引き受けるために語って下さったのです。十字架に進むアクセルをいっぱい踏み込むようにして、主は22節のみことばを語って下さいました。

裏切る者をのろうのではなく、むしろ裏切る者とともに食事をされ、裏切る者のために、わざわいを引き受けられた主であったことを思い起こします。